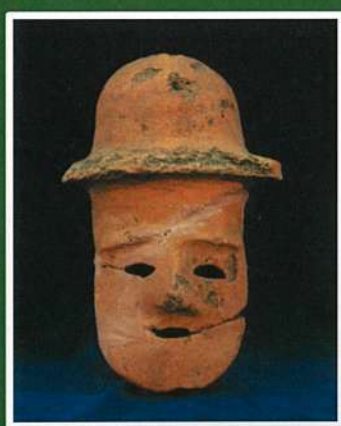


立正大学博物館

第十四回企画展

展示図録

# 東国の埴輪と埴輪窯



ごあいさつ

今回の展示で取り上げるテーマは埴輪である。

埴輪は、近年著しく研究が進み、生産・流通・消費のさまざまな側面にわたる論文が多く出されている。とりわけ、埴輪生産についての研究は精緻を極め、刷毛の観察に立脚して同工品を抽出し、工人を識別することさえ可能になった。その結果、数名の工人からなる工房の実体があきらかになり、経験を積んだ熟練工のもとに未熟な工人が配されていた状況も推測できるようになった。工人には、それぞれくせがあり、個性豊かな姿が浮かび上がってきた。

従来、考古学が依拠する型式学では、集団を担い手とする現象は解明できても、個人のあり方に迫ることは不可能とされていた。ところが、埴輪研究は、見事にその壁を打ち破ってみせた。今や、埴輪の作者を考古学の方法で論じることが可能になり、その作者が属した工房の埴輪がどの範囲まで流通したかも知ることができるようになった。流通という一見一過性をもつ現象のように思われることも、生産地が特定できれば、同工品や同型品の分布を手がかりに、その具体相をあきらかにできる時代になった。

こうした研究が可能になった背景には、埴輪窯の発掘調査事例が確実に増加し、埴輪生産の現場の実態が明るみになったことが挙げられよう。そこで、今回の展示では、東国の埴輪窯における埴輪生産に注目し、埴輪から古墳時代の東国社会を読む試みをおこなった。

また、ふだん展示されることの少ない立正大学博物館所蔵の埴輪をまとめて公開したので、立正大学博物館のコレクションの奥深さを堪能いただければ幸いである。

本展は、埴輪について考えるまたとなり機会であるので、ぜひご観覧いただきたい。

令和元年 10月吉日

立正大学博物館長 時枝 務

## 目次

|                  |    |
|------------------|----|
| はじめに             | 1  |
| 1 埴輪の生産と供給       | 3  |
| 2 熊谷市江南地域の古墳と埴輪窯 | 5  |
| 3 生出塚埴輪窯跡        | 11 |
| 4 駒形神社埴輪窯跡       | 13 |
| おわりに             | 17 |

## 凡例

- 1 本書は第14回企画展「東国の埴輪と埴輪窯」(会期:令和元年10月30日(水)~12月13日(金))の展示図録として作成した。
- 2 本図録の作成は、館長時枝務のもと学芸員・足立佳代が執筆、編集した。坂詰秀一初代館長、池上悟二代目館長には特にご指導いただいた。
- 3 資料の写真は、主に足立佳代学芸員が撮影し、高橋杜人、高橋一生、木村藍が手伝った。また、一部所蔵機関から写真を借用し掲載した。
- 4 本図録に用いた挿図の出展及び引用・参考した文献は巻末に掲げた。
- 5 展示にあたっては、浅見幹雄、高橋一生、木村藍、佐藤豪大が手伝った。

## 協力者

新井 端 板橋 稔 犬木 努 井上尚明 岩松大輔 上野真由美 上野優真 内山敏行 遠坂純伸  
大谷 徹 岡崎完樹 蔵持俊輔 栗田莉沙 小島祥由 小宮俊久 齋藤糸子 篠原浩恵 志村 哲  
高山 優 田村咲希 日高 慎 山崎 武 三木智一 三辻利一 宮田 毅 安良岡伸之 渡辺 清志 (五十音順 敬称略)

熊谷市教育委員会 鴻巣市教育委員会 太田市教育委員会 足利市教育委員会 小山市教育委員会  
栃木県埋蔵文化財センター 埴輪研究会 立正大学考古学研究室 立正大学考古学研究会

## はじめに

博物館の人気者といえば「埴輪」。特に「踊る埴輪」は誰もが知るキャラクターとして今や埴輪のアイコンとなっています。しかし、この「踊る埴輪」が熊谷市江南地域の野原古墳（野原古墳群中の前方後円墳）から出土したことを知る人は多くはないでしょう。

野原古墳群は、立正大学博物館が所在する熊谷キャンパスの南東にあり、立正大学考古学研究室ではこの古墳群を昭和39年に発掘調査しています。また、「踊る埴輪」を製作したと推定される窯跡の一つが熊谷市江南地区にある権現坂埴輪窯跡群です。

### ◆「踊る埴輪」は踊っている？

昭和5年に野原古墳から出土した埴輪は、まん丸にくり抜かれた目と口、片手を上に挙げた仕草がまるで踊りを踊っているように見えることから「踊る埴輪」と称され、その姿が多くの人に親しまれています。現在東京国立博物館に所蔵され、「東博<sup>あづまひろし</sup>」（トーハク

ん）というキャラクターにもなっています。最近では、世界遺産登録に湧いた百舌鳥・古市古墳群の「埴輪課長」も「踊る埴輪」がモデルです。

でも、「踊る埴輪」本当に踊っているのでしょうか。

「踊る埴輪」の姿をよくみてみましょう。左手を上へ挙げ、右手は前にあります。腰には紐を巻き左側の腰にはねじった紐が下げられています。後姿を見てみましょう。腰に鎌を提げています。同じような特徴を持つ人物埴輪は他の古墳からも出土し、その多くが、馬形埴輪の近くから見つかっています。こうしたことから、片手で手綱を曳き、腰に飼葉を刈るための鎌を下げた「馬飼」を表す人物埴輪と考えられています。

参考にあげた西高椅27号墳は、栃木県小山市東部にある100基を超える群集墳のうち1基で、直径21.7mの円墳です。馬飼と思われる人物埴輪のほかにも人物埴輪5体、馬形埴輪1体、円筒埴輪等が出土しています。



1 「踊る埴輪」（複製：熊谷市教育委員会）



参考：西高椅27号墳 人物埴輪（馬曳ぎ）  
（写真提供：小山市教育委員会）

#### ◆埴輪とはなにか

埴輪は古墳時代に造られた首長層の墳墓である古墳の埴丘に立てるための土製品です。

埴輪の起源は、弥生時代後期の吉備地方の埴丘墓に供えられた特殊器台という土製品です。円筒形の胴部の上部に受け口状に広がった口縁があり、その上には口縁が広がった特殊壺を載せます。

3世紀、古墳時代の始まりとともに特殊器台と特殊壺は畿内大和政権の前方後円墳祭祀に取り入れられ、墓に備えるための器から埋葬施設や埴丘の周囲を区画するための埴輪へと変わります。形も特殊器台は特殊器台形円筒埴輪に、壺を載せた特殊器台は朝顔形埴輪へと変化していきます。

畿内で作り出された埴輪は、大和政権による前方後円墳の広がりとともに各地に広がっていきます。

その後、4世紀の初め頃には埴頂部に埋葬された首長の居館をあらわすような家形、首長の威厳を保つように蓋(きぬがさ)形、鬚(さしば)形、椅子形など、首長を守るための盾形、鞆形、大刀形、鞆形、甲冑形など器財埴輪が立てられるようになります。動物では鶏形が最も早く出現します。

古墳時代中期・5世紀になると巫女などの人物埴輪があらわれ、馬形、鹿形、猪形、水鳥形など動物埴輪が立てられるようになり、次第に埴輪の種類が増えます。それと同時に埴輪の配置も変化し、円筒埴輪や朝顔形埴輪を埴丘の周囲を巡らすように立て並べ、造り出しや周溝の堤、くびれ部などに人物埴輪群や動物埴輪等を配置し、狩猟や鶉飼の様子を表すようにもなります。

こうした埴輪の祭式については、①首長権形象儀礼②喪葬儀礼③もがりの再現④被葬者

の顕彰⑤被葬者の供養⑥被葬者への近侍的奉仕行為などの説が提示されています。

古墳時代後期・6世紀中ごろになると、畿内を中心に次第に古墳に埴輪が立てられなくなりますが、東国では埴輪の生産、古墳への樹立が続けられます。「踊り埴輪」をはじめとする表情豊かで、バリエーションあふれる埴輪群は古墳時代後期の東国の古墳を特徴づけるものです。

#### ◆立正大学博物館の埴輪



(部一ノ品備) 室品考史歴史

絵はがきに掲載された埴輪

本館は、考古学研究室で調査した古代窯業資料、眞鍋孝志氏による梵音具等、立正大学出身の吉田格氏による旧石器・縄文等の寄贈品、立正大学が行なった海外の仏教遺跡調査を中心に資料を収蔵・展示しています。これらのほかに、学内の各所に分散・所蔵されていた資料を一括して保管し、展示しています。

昭和28年の立正大学を紹介する絵葉書には、歴史参考室の備品として土器ともに埴輪が掲載され現在博物館に収蔵されています。こうした資料のほか、前述した吉田格寄贈品や立正大学考古学研究室で調査した古墳の埴輪を展示し、周辺地域の埴輪と埴輪窯、現在の埴輪研究について紹介します。

## 1 埴輪の生産と供給

### ◆埴輪窯の研究

明治39(1906)年、柴田常恵により群馬県藤岡市で本郷埴輪窯跡が発見されました。これは、埴輪窯の初めての発見でした。その後、昭和18・19(1943・1944)年に尾崎喜左雄により全長10mの登り窯が発掘されました。昭和元(1925)年には、森本六爾により下沼部埴輪製作址が調査されました。窯跡や埴輪を製作したと思われる竪穴住居からは粘土の塊が出土したとの記録があります。

当時の出土資料は、残念ながら行方不明ですが、当館に下沼部埴輪窯跡出土と伝わる円筒埴輪が所蔵されています。埴輪の外面に「池上町久ヶ原」と注記され、坂詰秀一先生によると「昭和のはじめ頃、立正大の学生たちが、森本六爾が調査していた久ヶ原遺跡の手伝いに行っていたので、その時もらったものではないか。」とのことです。

昭和30年代から40年代には、窯業史研究の一環として、神奈川県白井坂埴輪窯跡、群馬県の駒形神社埴輪窯跡、栃木県の唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡などが発掘調査されています。その後も、茨城県の馬渡埴輪製作遺跡、埼玉県の生田塚埴輪窯跡などの調査により、登窯の構造や、丘陵斜面に並列して築かれる窯、作業場を共有しながら八手状に築かれる

窯などが明らかになりました。

現在、東国で27の埴輪窯跡が確認されています。

1 円筒埴輪 (伝下沼部埴輪窯跡)



### ◆埴輪と埴輪窯の関係

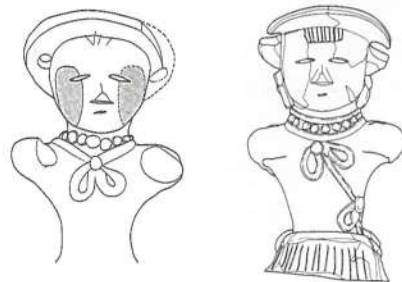
埴輪が作られ始めた頃は、土器と同じように焚き火で焼いていました。4世紀の終わり頃に朝鮮半島から窯で土器を焼く技術が伝えられ、須恵器が製作されるようになります。5世紀中頃には畿内や九州で窯による埴輪の生産が始まり、その後、地方にも広がっていききました。

埴輪窯は、丘陵斜面にトンネル状に登窯を築きます。緩い傾斜を持つ丘陵斜面、良質な粘土、豊富な燃料が必要で、それらの条件を満たす土地が生産地として選択されます。

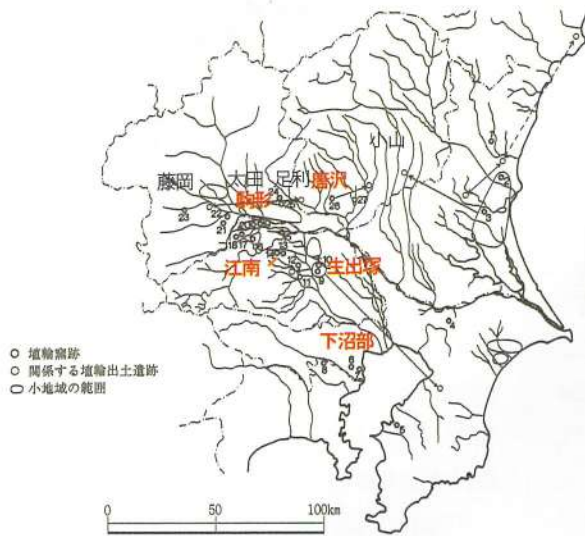
100mを超えるような大型の古墳に立てられる埴輪は、数千本にもなります。埴輪を必要とする首長層は、数カ所の窯から埴輪を集め、優良な生産地は、より生産性を高めるため窯を増やし、長期間に渡って操業し、広い範囲に埴輪を供給しました。東国最大の埴輪窯である生田塚埴輪窯跡では、40基もの窯跡が確認されています。

埴輪窯古墳の需給関係解明のためには、窯跡と古墳から出土した埴輪を比較し、同定する必要があります。下記の方法があります。

①形態や色、大きさ…円筒埴輪のプロポーション、人物埴輪の顔の表情、持ち物など  
人物埴輪の顔は、目や口の開け方で表情が異なります。また、ポーズや衣服の表現によっても比較できます。



熊野古墳と観音山古墳の人物埴輪



小地域と埴輪の窯の分布 (日高 2015 加筆より)

栃木県足利市の熊野古墳と群馬県高崎市の観音山古墳の女子埴輪は、垂れ目に細く開けた目、小さく開けた口、三角の鼻、前に出した両腕など表情やポーズが類似しています。古墳は 30 km の距離がありますが同一工人による制作と考えられています。

②製作技法…外面の刷毛目工具、人物埴輪の腕の作り方など

埴輪の表面にみられる細かい条線・ハケメは、「刷毛目工具」という薄い木片の小口で埴輪の器壁を調整する際についたものです。木片の小口は年輪に4つ細かい凹凸があり、これが埴輪に転写され、ハケメとなります。ハケメの観察によって異なった埴輪に同じ刷毛目工具を使用したことが分かり、同一工人が製作したことが確認されています。

生出塚埴輪窯跡では、埴輪の刷毛目のデータベース化が進められ、埼玉古墳群への供給関係が実証されています。

③胎土の混入物…鉱物や化石由来の物質、火

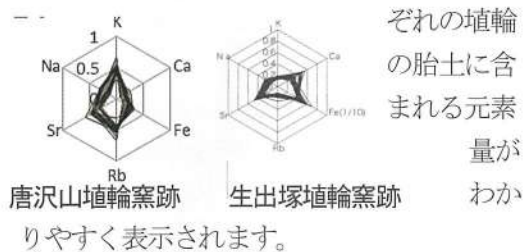
山噴出物など。

埴輪と胎土を観察すると、小石や砂が混ざっています。埴輪の粘土に砂などを混ぜることで焼き縮みを抑える効果があります。こうした混入物の中には、その土地特有の鉱物などを含む場合があります。たとえば、茨城県の筑波山周辺では、埴輪の胎土に雲母が含まれており、胎土の観察で産地を推定することができます。

④蛍光X線による胎土分析…胎

土に含まれる6元素の量

埴輪の原料である粘土は、採取された土地の岩盤の成分により元素の含有量が異なります。この性質を利用して蛍光X線により K : カリウム、Ca : カルシウム、Fe : 鉄、Rb : ルビジウム、Sr : ストロンチウム、Na : ナトリウムの分量を分析します。6元素をレーダーチャートでグラフ図を比較することで、それ



千葉県の上倉1号墳の人物埴輪は、形態、製作技法、刷毛目工具の同定、胎土分析など複数の方法により、生出塚埴輪窯跡の製品であることが確認された例です。一つの方法だけでなく、複数の方法を組み合わせて同定することにより、実証性が高まります。

埴輪の需給関係の研究により、地域の首長層と埴輪の生産体制、埴輪生産地の地域間交流など古墳時代の社会が解明されます。

## 2 熊谷市江南地域の古墳と埴輪窯

埼玉県熊谷市は、北に利根川、南に荒川という大河が流れています。江南地域は荒川の南に東西に広がる江南台地を中心とした地域です。江南台地の北には和田吉野川、南には和田川が東に流れ、日当たりの良い台地上には旧石器時代から中近世まで様々な遺跡があります。

古墳時代後期、埴輪が盛んに立てられた時代には江南台地の北縁に姥ヶ沢埴輪窯跡、権現坂埴輪窯跡が造られます。

姥ヶ沢埴輪窯では埴輪の形態などから、5世紀末から6世紀初頭、この地域に窯が導入されて間もない時期に操業が始まったものと考えられます。窯の操業が停止した後は、近接する権現坂埴輪窯跡に収束していくものと考えられます。

権現坂埴輪窯は、姥ヶ沢埴輪窯跡より規模が大きく、大型の埴輪も生産していました。主に地域の首長墓や中小古墳に供給しながら埼玉古墳群へも供給していたことがわかっています。

江南台地の二つの窯は、北武蔵における拠点生産地である生出家埴輪窯跡の衛星生産地として位置付けられています。

野原古墳群は、有名な踊る埴輪が出土しています。埴輪は、権現坂埴輪窯跡で生産された可能性があります。20基以上の古墳からなる群集墳ですが、古墳群の東にある野原東古墳群も含めるとさらに大きな古墳群であると考えられます。

文殊寺境内からは埴輪片が採集されており今後の調査が期待されます。



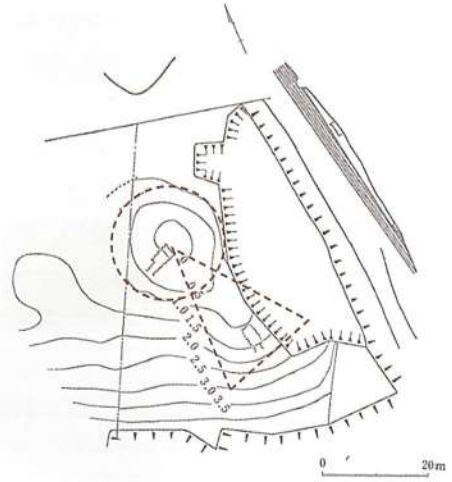
江南地域の埴輪窯と野原古墳位置図

◆野原古墳群

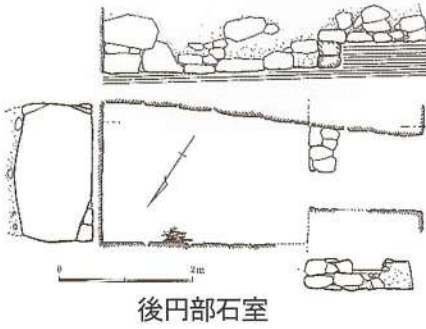
野原古墳群は、熊谷市の南部を流れる和田川左岸の南面する丘陵斜面に位置します。前方後円墳1基（野原古墳）と28基の円墳からなる古墳時代後期・6世紀後半から終末期・7世紀前半代に築造された群集墳です。

昭和5（1930）年3月18日、山林の開墾中に「踊る埴輪」を含む埴輪や勾玉、刀などが発見され、昭和7年に東京帝室博物館が購入しています。

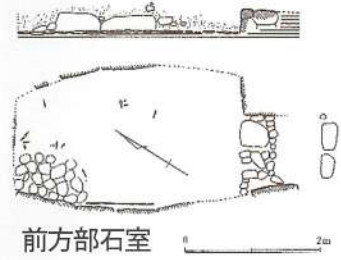
その後昭和37（1962）年、野原古墳の採土工事中に発掘調査が行われ、全長40m、



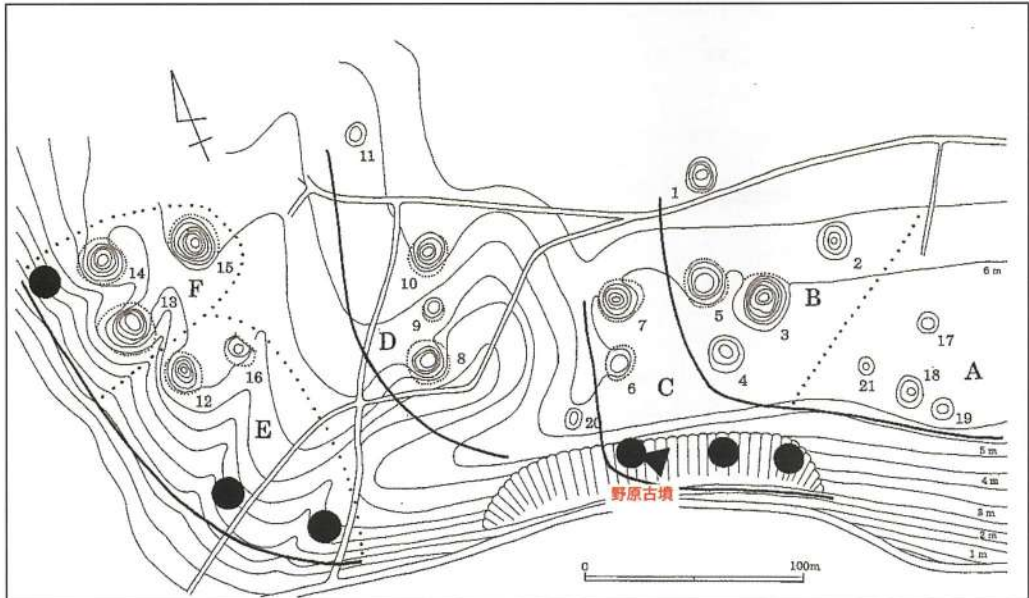
野原古墳平面図



後円部石室



前方部石室



野原古墳群 群構成図



高さ5m、後円部直径16mの前方後円墳で後円部と前方部に横穴式石室を持つことが確認されました。埴輪も、人物埴輪頭部、大刀形埴輪、鬚形埴輪などが出土しています。人物埴輪の表情は、踊る埴輪に見られる円い目鼻のものだけでなく、横に細長く開けた目鼻や「へ」の字状の目のものなどがあります。権現坂埴輪窯の製品の可能性があります。

野原古墳が前方後円墳であること、多種の埴輪が出土していること、石室の形態などから、6世紀後半に築造された江南地域の首長墓であり、野原古墳群の造営の契機となった古墳と考えられます。



野原古墳出土「踊る埴輪」実測図



2 人物埴輪頭



3 人物埴輪頭部



4 人物埴輪頭部



5 鬚形埴輪

### ◆姥ヶ沢埴輪窯

埼玉県南部、和田吉野川を北に望む江南台地北縁にあった熊谷市千代にあった埴輪窯跡です。平成2（1990）年ゴルフ場造成に伴い発掘調査されました。江南台地北縁に細長く開析された谷の緩い斜面にあり、8基の埴輪が2段にわたり並列して、下段から上段へ順次築造されていたことがわかりました。

窯跡は半地下式の登窯で、窯の中には円筒埴輪を焼き台として使用していたものもありました。

出土した円筒埴輪には、高さ30～40cmで二条・三条突帯のものが多く、通常の透かし孔のほか小円孔を開けているものがあります。人物埴輪は小型品で、腕、掌、鬚などの部品が出土しています。



姥ヶ沢埴輪窯跡出土状況

形象埴輪は、馬、鹿、家、大刀などの部品が出土しています。

埴輪は、いずれも小型品が多く、周辺の中小古墳に供給されたものと考えられます。また、窯跡内や灰原から石製模造品や土師器などが出土しており、窯での祭祀が行われていたと推定されます。



11 土師器 罎



12 三環鈴形埴輪



13 石製模造品



14 鹿形埴輪



10 円筒埴輪

### ◆権現坂埴輪窯跡

和田吉野川の右岸、江南台地北縁に位置します。昭和37（1962）年、3基の窯跡が発掘調査され、その後、昭和39年（1964）に4基の窯跡が確認されています（東群）。平成元（1989）年から2年にかけての調査では、埴輪工房跡と思われる住居跡、粘土採掘坑が確認され、多量の埴輪片が出土しています。平成3（1991）年の調査では、開析谷を隔てた西側に10基余りの窯跡群（西群）が確認され、4基の窯跡が発掘調査されています。

円筒埴輪は、姥ヶ沢埴輪窯跡で見られるような中小型品だけでなく、大型の円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土しています。おそらく、埼玉古墳群へも供給されていたものと考えられます。また、人物埴輪の特徴などから、妻沼低地にある中条古墳群に供給された可能性があります。

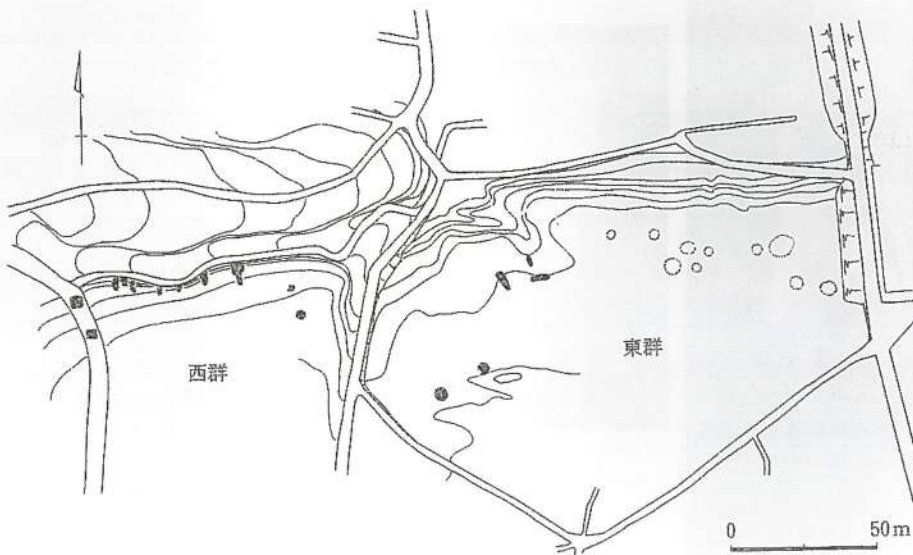
出土した埴輪の特徴などから、6世紀前半代から後半まで操業されました。



権現坂埴輪窯跡 出土状況



権現坂埴輪窯跡 現況



権現坂埴輪窯跡平面図



17 人物埴輪



18 人物埴輪



15 馬形埴輪



16 馬形埴輪



7 盾持武人埴輪



8 円筒埴輪



9 朝顔形埴輪

### 3 生出塚埴輪窯跡

#### ◆生出塚埴輪窯跡

古墳時代後期における東国最大級の埴輪生産地の遺跡です。鴻巣市の中心市街地の北、元荒川の右岸の台地上に位置します。

昭和51(1979)年に埴輪窯跡が確認されて以来、40回以上の調査が行われ、埴輪窯跡40基、工房跡2基、住居跡9基、粘土採掘坑1基などが確認されています。

窯跡は、作業場・灰原を掘り下げ、そこからハツ手状に数基の窯を順次築いています。出土した埴輪から5世紀末から6世紀末葉まで操業されたと推定されます。操業の契機となったのは、武蔵最大の首長墓群である埼玉古墳群の造営です。北武蔵には埴輪窯が数多くみられますが、その中でも生出塚埴輪窯跡は、拠点的な生産地と考えられます。



生出塚埴輪窯跡 埴輪出土状況



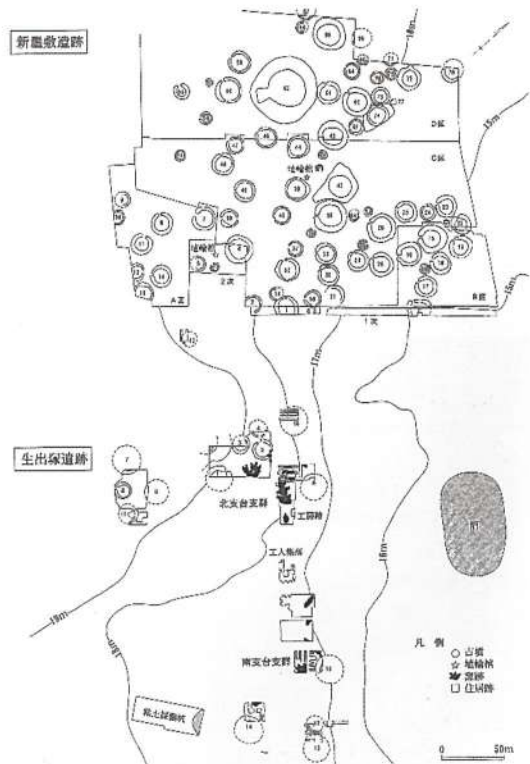
生出塚埴輪窯跡 ハツ手状の窯の様子

埴輪の供給先は埼玉古墳群やその周辺の古墳のほか、千葉県の上倉1号墳、東京都の多摩川台1号墳、芝丸山古墳群、神奈川県の本門1号墳など広範囲に及んでいます。これらの古墳には、河川を利用して埴輪を運んだと推定されます。

#### ◆生出塚古墳群と新屋敷古墳群

生出塚埴輪窯跡周辺には16基の円墳(2号墳は前方後円墳の可能性あり)からなる生出塚古墳群が分布し、さらに北西に向かって77基の古墳からなる新屋敷古墳群が広がっています。5世紀後半代に築造された帆立貝式古墳である新屋敷60号墳を群集墳造営の契機としています。

生出塚古墳群は、埴輪窯跡B群に隣接し、



生出塚埴輪窯跡と古墳群

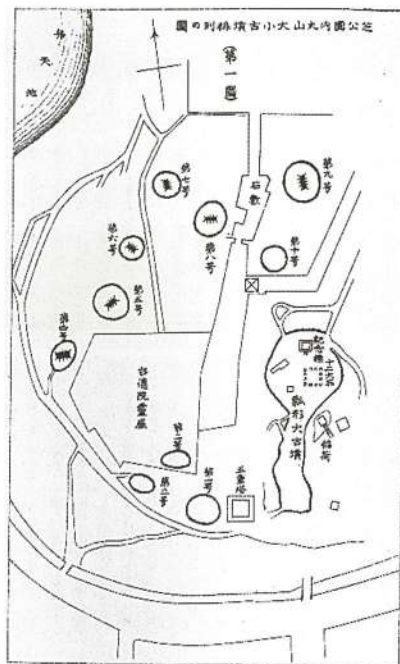
それぞれの古墳が密集しています。3号墳は墳丘の直径約11mで、周溝を含めた規模は約14mです。周溝からは、人物埴輪頭部2点馬形埴輪頭部2点のほか円筒埴輪片が周溝全域から出土しています。

埼玉古墳群に埴輪を供給した生出家埴輪窯跡に隣接する群集墳の被葬者は、埴輪の生産に関わり、埼玉古墳群の首長層を支えた政治的地域集団として位置づけられています。

### ◆芝丸山公園古墳

東京都港区、東京湾から約2km西にある丘陵に位置します。前方後円墳1基、円墳10基からなる古墳群でしたが、戦後の開発などにより前方後円墳である芝丸山古墳が残るのみとなっています。

明治30(1897)年、東京帝国大学の坪井正五郎によって前方後円墳である芝丸山古墳と、周辺の円墳群が発掘調査されました。調査後、古墳の説明板を立てること、出土品を古墳の近くで展示することなどを提案しています。現在の史跡整備の嚆矢として注目されます。その後、大正6(1913)年に第7号古墳の外から人物埴輪頭部2体が



芝丸山古墳群平面図



大正時代出土の埴輪



21 人物埴輪



22 人物埴輪

出土しています。記録に残る写真からは、生出家埴輪窯跡の埴輪と特徴が類似しています。立正大学博物館所蔵の伝芝丸山古墳出土人物埴輪も特徴が一致しており、いずれも生出家埴輪窯跡で製作された埴輪と考えられます。

戦後は、昭和33(1958)年明治大学によって測量と発掘調査が行われています。

## 4 駒形神社埴輪窯跡

上野では、西部の藤岡地域と東部の太田地域に埴輪の二大産地が知られています。

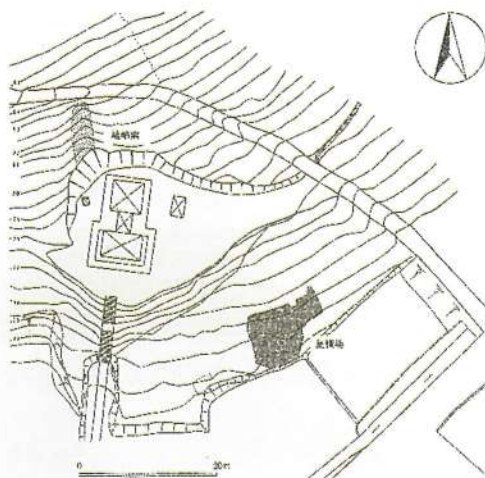
藤岡地域には、日本で初めて埴輪窯が見された本郷埴輪窯跡や猿田窯跡があり、七輿山古墳、綿貫観音山古墳などの前方後円墳に供給されていたことがわかっています。

太田地域では、渡良瀬川流域、駒形神社埴輪窯跡、金山の東に東金井窯跡、成塚団地埴輪窯跡があります。

### ◆駒形神社埴輪窯跡

太田市北部から北西に伸びる八王子丘陵南西麓に位置しています。大正12(1923)年にその存在が知られ、昭和8(1933)には神社境内に接する畑から埴輪が出土し、東京帝室博物館に寄贈されています。

昭和40(1965)年には大川清氏(当時早稲田大学)によって、社殿裏の埴輪窯跡と埴輪集積場が調査されています。昭和62年には太田市教育委員会によって埴輪集積場の発掘調査が行われています。集積場は、等高線



駒形神社埴輪窯跡の平面図



埴輪集積場の出土状況

に沿って東西に長く、南北3.5m、東西7.5mの狭い範囲に約200個体の埴輪が出土しました。埴輪は折り重なるように出土し、基部の状態などから当初は立て並べられていたものが西側に倒れたと考えられます。また、種類別に埴輪が置かれていたことがわかりました。調査状況から、等高線に沿って十数基超える埴輪窯跡が連続と構築され、緩斜面には階段状に数段にわたって集積場が存在していたと考えられています。埴輪の形状などから、埴輪が制作されたのは6世紀末ごろで、制作された埴輪が古墳に立てられることなく集積されたままの状態であったと思われます。



23 鞍形埴輪



24 人物埴輪(女子)

◆「ヤブ塚古墳」出土の埴輪

これらの埴輪は、本館が所蔵する吉田格コレクションの一部です。吉田格氏は、立正大学出身の縄文研究者として著名で、縄文遺跡の出土品を中心とする氏のコレクションを当館に寄贈されました。

埴輪の来歴は不明ですが、吉田コレクションの目録には「藪塚本町」とあり、群馬県太田市藪塚（旧藪塚町）から出土したものと思われる。

太田市藪塚は、太田市の北西部にあり平成17年太田市と合併するまでは藪塚町で現在旧町内におよそ100基の古墳が知られていま

す。本館に所蔵されている埴輪は人物、家、馬、器財など約20点あります。

人物は、顔面の右頬部、首部、衣服の裾部の3点があります。器財は盾で、表面に線刻が見られます。

家は屋根に飾りがつき、妻側の壁に左右それぞれに、丸い窓と方形の窓が開けられています。

埴輪の形態や胎土などから太田市の駒形神社埴輪窯跡から供給されたものと考えられます。



26 人物埴輪



27 家形埴輪（屋根）



26 器財埴輪



27 家形埴輪（壁）



### ◆機神山山頂古墳

栃木県足利市西宮町標高約 118mの機神山山頂に位置します。明治 26 年 (1893)、坪井正五郎による足利公園古墳の発掘調査を手伝った峯岸政逸によって横穴式石室が発掘され直刀、鉄鍬、馬具、鏡、勾玉、須恵器などの副葬品が出土したほか墳丘からは円筒埴輪、人物埴輪等が出土しています。

平成 20 年に保存整備工事に伴う発掘調査で全長 36m以上、高さ 4m以上の二段築成、二段目墳丘斜面にはチャートの割石からなる葺石が確認されました。また、1 段目テラスのくびれ部からは円筒埴輪が立った状態で出土し、周辺からは数多くの器財埴輪が出土しました。出土遺物や石室の形態などから 6 世紀後半に築造されました。



機神山山頂古墳全景 (西上空から)

埴輪の蛍光 X 線による胎土分析からは、駒形神社埴輪窯跡の埴輪と近い値が得られています。埴輪の形態や色調、胎土の肉眼観察からも駒形神社埴輪窯跡と類似しており、おそらく、駒形神社埴輪窯跡から供給されたものと考えられます。



円筒埴輪出土状況



形象埴輪出土状況



28 鞍形埴輪



30 鬚形埴輪



29 円筒埴輪

◆田中1号墳

足利市の中央、渡良瀬川右岸の独立丘陵の南東部に分布する古墳群です。円墳4基がありましたが、そのうち2基はかつて調査され現在は残っていません。

平成19年、立正大学考古学研究室により2号墳の測量調査が実施された折、1号墳の所有者から耕作中に採取されたという埴輪片を提供されました。古墳の墳丘はほぼ耕作により失われていましたが、石室の奥壁、側壁の一部が残されていました。埴輪は、ほとんどが形象埴輪の破片で、人物、家、器財、馬があります。

人物埴輪は、写真左が顔面の目から下の部分、中央が腕、右が左顔面下部である。右は

ほお部に線状の赤彩が見られ、左の人物埴輪と比べ大きいことから、盾持ち人の可能性があります。器財埴輪は、盾、鞞、鞆があります。

家は、屋根部で蕨手状の線刻、赤色と白色の彩色が見られます。屋根部のもう1点は、三角文が線刻されています。1つの家形埴輪の屋根の表裏で異なった文様だった可能性があります。

馬は、飾馬で剣菱形杏葉をかたどったと思われる部材や鈴と思われる部材があります。

埴輪の形態や胎土などから、太田市の駒形神社埴輪窯跡で焼かれ、田中1号墳に供給されたものと考えられます。



25 人物埴輪



25 家形埴輪



25 器財埴輪



25 馬形埴輪

## おわりに

当館に、出土地不明の朝顔型埴輪があります。昭和28年の絵葉書に掲載されており、その頃には立正大学が所蔵していました。

口縁以外はほぼ完形で、全体に薄いつくりです。外面はタテハケですが、肩部は突帯を貼り付けた後にもタテハケを施しています。内面は、ナナメハケの後タテハケ調整をしています。2条目と3条目の突帯間に透孔が対で開けられ、ひとつの孔の横に先刻があります。埴輪の特徴から、5世紀末頃に作られたと考えられます。

蛍光X線分析によると、生出塚埴輪窯跡に近い値がみられ、生出塚やその周辺の埴輪窯で製作された可能性あります。

考古資料は、出土地が不明な場合、資料価値が低いですが、この埴輪のように長年の研究によって様々な視点から調査することによって資料として活用することができます。

立正大学博物館では、伝芝丸山古墳出土の人物埴輪をはじめ、まだ調査が進んでいない埴輪があります。

今後は、これまでの埴輪研究の成果を取り入れながら、調査・研究を進めていくことが課題です。



20 朝顔形埴輪 (出土地不明)

第 14 回企画展「東国の埴輪と埴輪窯」展示目録

| No. | 資料名         | 出土地           | 大きさ cm  | 所蔵者        |
|-----|-------------|---------------|---------|------------|
| 1   | 踊る埴輪 小 (複製) |               | 高さ 57   | 熊谷市教育委員会   |
| 2   | 人物埴輪頭部      | 野原古墳          | 高さ 22   | 熊谷市教育委員会   |
| 3   | 人物埴輪頭部      | 野原古墳群         | 高さ 15   | 熊谷市教育委員会   |
| 4   | 大刀形埴輪       | 野原古墳群         | 高さ 28   | 熊谷市教育委員会   |
| 5   | 鬚形埴輪        | 野原古墳群         | 高さ 27   | 熊谷市教育委員会   |
| 6   | 円筒埴輪片       | 文殊寺境内         | 高さ 3.9  | 個人         |
| 7   | 盾持武人埴輪      | 権現坂埴輪窯跡       | 高さ 83   | 熊谷市教育委員会   |
| 8   | 円筒埴輪        | 権現坂埴輪窯跡       | 高さ 33   | 熊谷市教育委員会   |
| 9   | 朝顔形埴輪       | 権現坂埴輪窯跡       | 高さ 45   | 熊谷市教育委員会   |
| 10  | 円筒埴輪        | 姥ヶ沢埴輪窯跡       | 高さ 38   | 熊谷市教育委員会   |
| 11  | 土師器         | 姥ヶ沢埴輪窯跡       | 高さ 7    | 熊谷市教育委員会   |
| 12  | 三環鈴形埴輪      | 姥ヶ沢埴輪窯跡       | 幅 10    | 熊谷市教育委員会   |
| 13  | 石製模造品       | 姥ヶ沢埴輪窯跡       |         | 熊谷市教育委員会   |
| 14  | 鹿形埴輪        | 姥ヶ沢埴輪窯跡       | 高さ 18   | 熊谷市教育委員会   |
| 15  | 馬形埴輪        | 権現坂埴輪窯跡       | 長さ 17   | 熊谷市教育委員会   |
| 16  | 馬形埴輪        | 権現坂埴輪窯跡       | 長さ 25   | 熊谷市教育委員会   |
| 17  | 人物埴輪        | 権現坂埴輪窯跡       | 高さ 18   | 熊谷市教育委員会   |
| 18  | 人物埴輪        | 権現坂埴輪窯跡       | 高さ 26   | 熊谷市教育委員会   |
| 19  | 円筒埴輪        | 伝下沼部          | 高さ 32   | 立正大学博物館    |
| 20  | 朝顔形埴輪       | 不明            | 高さ 43.8 | 立正大学博物館    |
| 21  | 人物埴輪        | 伝芝丸山古墳        | 高さ 23   | 立正大学博物館    |
| 22  | 人物埴輪        | 生出塚3号墳        | 高さ 25   | 鴻巣市教育委員会   |
| 23  | 靱形埴輪        | 駒形神社埴輪窯跡      | 高さ 85   | 太田市教育委員会   |
| 24  | 人物埴輪        | 駒形神社埴輪窯跡      | 高さ 25   | 太田市教育委員会   |
| 25  | 形象埴輪片       | 田中1号墳         |         | 立正大学考古学研究室 |
| 26  | 形象埴輪片       | 藪塚 (吉田コレクション) |         | 立正大学博物館    |
| 27  | 家形埴輪        | 藪塚 (吉田コレクション) | 幅 33    | 立正大学博物館    |
| 28  | 靱形埴輪        | 機神山山頂古墳       | 高さ 22   | 足利市教育委員会   |
| 29  | 円筒埴輪        | 機神山山頂古墳       | 高さ 41   | 足利市教育委員会   |
| 30  | 鬚形埴輪        | 機神山山頂古墳       | 高さ 34   | 足利市教育委員会   |

## 【引用参考文献】

- 足利市文化財総合調査団 1986 「1. 田中古墳群」『年報VI』足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会  
足利市教育委員会 2010 「機神山山頂古墳第1次発掘調査」『掘り出された足利の歴史』  
足立佳代 2014 「立正大学所蔵の埴輪について（1）（2）」『立正大学博物館年報』13 立正大学博物館  
足立佳代 2017 「両毛地域の埴輪の胎土分析」『埴輪研究会誌』埴輪研究会  
池上悟 2008 『野原古墳群発掘調査報告書』立正大学考古学会  
池上悟・内田勇樹 2010 『第7回特別展 群集墳の時代—野原古墳群—』立正大学博物館  
犬木努 1995 「下総型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』1 埴輪研究会  
内山敏行 2019 「第6章 小結」『西高橋遺跡』2 小山市・公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
梅沢重昭 1990 「一 埴輪の発達」『群馬県史』通史編1 原始古代1 群馬県  
大澤伸啓 1991 「馬飼いの人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第13集 栃木県考古学会  
大谷徹ほか 1998 『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
塚田良道 1992 「鷹匠と馬飼」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会  
大塚初重・梅沢重昭 1965 「東京都港区芝丸山古墳群の調査—丸山古墳の実測調査と第一号墳・第四号墳の発掘調査—」『考古学雑誌』第51巻第1号 日本考古学会  
加部二生 2017 「群馬県東部地域における主要古墳出土の埴輪生産地推定」『埴輪研究会誌』第20号 埴輪研究会  
亀井正道 1978 「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『MUSEUM』第310号 東京国立博物館  
江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会 1998 『千代遺跡群—弥生・古墳時代編—』  
江南町町史編さん委員会『江南町史』資料編1 考古 江南町  
小橋健司 2004 「山倉1号墳の埴輪について」『市原市山倉古墳群』市原市教育委員会  
齋藤忠編・坪井正五郎 1972 「芝公園丸山古墳及び其近傍に在る数ヶ所の小古墳に付いて」『日本考古学選集3  
坪井正五郎 下』築地書館（初出1903『古蹟』1-1号 帝国古蹟取調会）  
坂詰秀一 1964 「埴輪窯研究序説」『立正史学』第28号 立正大学史学会  
坂詰秀一 1987 『東京23区』（日本の古代遺跡32）保育社  
坂詰秀一 2017 「窯業史談話会のこと」『日本考古学史研究』第5号 日本考古学史学会  
坂詰秀一 1965 「神奈川県白井坂埴輪窯跡」『武蔵野』第44巻代2・3号合併号  
城倉正祥 2007 「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』第11号 埴輪研究会  
城倉正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社  
高田大輔 2010 『東日本最大級の埴輪工房・生出塚埴輪窯』新泉社  
高山優ほか 2019 『港区と考古学—未来へと続く、遺跡からのメッセージ』港区立郷土歴史館  
寺田良喜 2017 「南武蔵における埴輪の生産と流通」『埴輪研究会誌』第20号 埴輪研究会  
東京市芝区役所 1938 『芝区誌』  
時枝務 2019 「文珠寺境内採集の埴輪片」『立正大学博物館館報 万吉だより』第29号 立正大学博物館  
鳥居龍蔵 1918 「芝公園古墳発見二個の埴輪土偶」『武蔵野』第1号第1巻  
萩原恭一 2011 「埴輪の生産と供給を胎土分析から考える」『埴輪研究会誌』第15号 埴輪研究会  
橋本博文 1996 「埴輪の需給関係」『佐野の埴輪展』佐野市郷土博物館  
日高慎 2015 『東国古墳時代埴輪生産組織の研究』雄山閣  
宮崎由利江 1990 「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」『古代』第90号 早稲田大学考古学会  
宮田毅 1996 「駒形神社埴輪窯跡」『太田市史』通史編 原始古代 太田市  
前澤輝政 1979 「第四章 古墳と古墳時代」『近代足利市史』第三巻史料編  
三辻利一・犬木努・近藤麻美 2014 「関東地域の埴輪の蛍光X線分析（1）—窯跡群の分類—」『埴輪研究会誌』  
第18号 埴輪研究会  
三辻利一・犬木努 2019 「第5章 西高橋25号墳・27号墳出土埴輪の蛍光X線分析」『西高橋遺跡』2  
小山市・公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
森本六爾 1930 「埴輪製作所址及窯跡」『考古学』第1巻第4号  
藪塚本町誌編纂室 1991 『藪塚本町誌』上 藪塚本町  
鴻巣市遺跡調査会 1981 『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会  
山崎武 2015 「埼玉県の埴輪窯における蛍光X線分析について」『埴輪研究会誌』第19号

## 【展示情報】

本展で紹介した埴輪は、下記の施設でも展示しています。

- 埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団(熊谷市船木台 4-4-1)  
新屋敷古墳群 など
- 江南文化財センター(熊谷市千代 329)  
姥ヶ沢埴輪窯跡  
権現坂埴輪窯跡  
野原古墳 など
- 鴻巣市文化センター クレアこうのす(鴻巣市中央 29-1)  
生出塚埴輪窯跡出土の埴輪群(重要文化財) など

|       |                         |
|-------|-------------------------|
| 表紙写真： | 姥ヶ沢埴輪窯跡(熊谷市教育委員会提供)     |
| 埴輪右   | 踊る埴輪(複製：熊谷市教育委員会提供)     |
| 埴輪中   | 人物埴輪(伝芝丸山古墳出土；立正大学博物巻蔵) |
| 埴輪左   | 人物埴輪(生出塚3号墳；鴻巣市教育委員会提供) |
| 裏表紙   | 円筒埴輪(伝下沼部埴輪窯跡；立正大学博物館蔵) |



